

前川 久男

特別支援教育研究センター主催セミナー（平成20年3月実施）で行いました筑波大学人間総合科学研究科 前川久男教授（当時 特別支援教育研究センター長）の講演「ロマンチックサイエンスと教育」の概要を掲載いたします。

はじめに

本セミナー第1部で連携研究の報告がされました。多様なお子さんが特別支援学校にはいらっしやると思います。その中で、単一の障害の子どもたちだけに視点を当てて、そこだけで関わるわけにはいきません。

視覚特別支援学校から、幼稚部のお子さんの話もありました。運動、あるいは動くということを通して外界を知る、それが非常に重要なことで、そのために視覚障害の中で動きを大切にしたいということがある、しかし、それは動かすことではない、子どもが自分の気持ちから動く、そのことをどうしたらうまく導き出せるかということですね。

それは、本当は全ての特別支援学校の中で、たとえば、肢体不自由であれば、運動が制約されてはいるが、その中から、子どもなりに、外界に働きかける中から、外界の意味を作り上げる、そのような仕事として、共通はしているが、関わっている子どもたちの姿に応じてそれぞれが専門性として発揮することが違ってきます。でも、そういう多様な子どもに対応するためには、今までとは違った視点で相互に連携しながら関わるのが重要です。これが第1部の連携報告の意味合いだったと思います。これからの特別支援学校、教育をつくっていく基礎、あるいは核となるだろうと思います。

今日は「ロマンチックサイエンスと教育」のテーマで話をするというのですが、「ロマンチックサイエンス」ということが私にとっては、重要なキーワードです。私自身は、「ロマンチックサイエンス」を実現できれば、それは素晴らしいと考えています。

教育が科学として成り立つのは、非常に古典的な科学ではなく、「ロマンチックサイエンス」としての科学としてしか成り立たないと考えて、そのことをお話ししたいと思います。

内言とは

ヴィゴツキーという人がいます。このヴィゴツキーという人が「内言」ということについて様々なことを言っ

ています。この内言を理解することは、実は、私たちが子どもを理解する上で非常に重要なキーワードになっています。

どんな言葉にも意味があります。言葉の意味とは、どういうことか、「私たちの意識に生じてくる全てのあらゆる心理的事実の総体」ということです。言葉を通じて私の中に起きてきた心理学的な様々な変容、すべての言葉の意味とヴィゴツキーは言っています。

なおかつ、その言葉の意味は常に変わる部分とあまり変わらない部分、そういう変動する部分の観点からいうと、いくつかの領域があるだろう、非常にダイナミックに変わっていく部分と、あまり変わらない部分とがあります。私たちは、国語教育というと、辞書をひいて、意味を調べます。一方で行間を読みなさいと言うこともあります。どちらかと言うと、言葉の意味は変わらないものとして受け止めます。実は、変わるものの方に、かなり重要な点があると思っています。

ヴィゴツキーは言葉の持つ「意味」と「意義」を言い分けてきています。変化する部分、心に起きてくる総体が言葉の意味だと言いましたが、変化する部分を「意味」だと言っています。気分が落ちている時とハイな時と、言葉の意味は変わっていく、その状況に応じて変化する現象を「言葉の意味」と呼びました。

それに対して、変化しない、安定した部分、それを「言葉の意義」と言っています。意義だけが言葉の意味ではない、私たちがお互に通じるのは、意義の部分だけではないのか、そうではないだろう。

ヴィゴツキーが例として挙げているのは、蟻とキリギリスです。キリギリスが蟻に最後に「ずっと歌ってばかりですって。結構なお仕事だ。だったら出て行って踊ればいいでしょう！」と言われます。「踊ればいいじゃん」というのは何か?、「踊りなさい」と言っているのではない、そのことが非常に大事なわけですね。文脈から別の内容を、その言葉が獲得しています。踊れ、はしゃぎまわれ、くたばれ!を同時に表している、それを意味だと言っています。そこが一番大事なところですよ。

また、別の例で、「はい」という返事があります。それは「はい、はい、はい」といわれたら、何かをしる、と私に何かを要求している、同じように、「はい」と言っても、微妙に違ったものになります。その違いを感じて、私たちは行動しています。そこで、言葉の意味ができあがっていています。こういったことが重要です。音の表出された形が同じだから、同じではありえないということが大事なわけです。そういうことで、ヴィゴツキーは、意味は意義を凌駕し優越する、意味の方がずっと大きい、無尽蔵だといいました。一対一の関係ではなく、自由な関係が言葉と意味の関係にはある、だから言葉の意味は無尽蔵にあると考えられます。

特に重要なことは、「内言」は、自分自身に向かって言う言葉、または、自分の中にある言葉、外に向かって表出している言葉ではないということ、言葉としての形を持っているかということ、持っていないかもしれません。自分に向かって言う言葉は、自分に言うので、全部わかっているから、いちいち言葉の形式をとる必要はない、言語の形式を取る必要はなくなってきます。「内言」は自分との対話だから何も特別に言う必要はないんです。最小限残るとしても、「する」という述語部分だけは残っているかもしれない、「私が何かをする」のではなく、「する」だけ残っているだけかもしれない、もっと省略されているかもしれません。要するに、知的なことと感情的な事柄が複合した内容になって詰め込まれていることです。「内言」の世界は感情と知的な理解、両方が組み合わさった形になっています。「まんま」と言えば、「おいしい」ということが、含まれているわけです。「もっと食べたい」ということも。感情と知的なものの理解が1つになり、そういうことで私たちの内言の世界はつくりられています。

意味の世界と言葉

私たちが発している言葉の意味は、「人格全体の内部構造に依存し、感情や欲求、価値観と言った情動の態度が個人の意識の中で独自の意味を構成する」、その人らしさがあるということです。それがまさに人格というもので、その内部構造に依存していて、そこから感情、情動、欲求が生み出されてくる、それが私の中に1つのことばとしての意味がつくりあげられてくるわけです。意味という水準、そこで始めて、知的に理解することと、情動的な、その人らしさから生まれてくる感情的なもの、それらが結びついています。

私はお酒が好きです。ビールと聞けば、飲みたいと思います。それは私の個人的趣味の世界ですし、感覚的なものの世界です。私にとって大事なものの1つです。たとえば「ビール」と言われても、嫌いという人もいます。でも、私は好き、皆違います。「ビール」と聞いて、泡が立った茶色のものというのは、知的理解の世界ですが、それが好きか嫌いか、もっと飲みたいと思うかというのが、私の中の意味の世界です。皆さんの意味の世界があります。意味の世界は言葉のようにバラバラになって存在していなくて、1つのものになっています。

それは同時統合、同時処理といっているものごとです。意味として私の中にあるものは、私はビールが好きですよという言葉の形式を持って語られるものとして存在していないということ、1つのアイデア、イメージ、1つのものとして私の中に存在していると考えられるわけです。

私たちが考えていること、私がしゃべっていることは、私の考えをしゃべっている、この考えは言葉として私の中に存在しているわけではありません。話している時に初めて言葉としての形式をとっています。私たちの思想、考え、アイデアは、全体の中で1つずつの単語をはるかにこえた容量を持っています。表現の時に、継次的なもの、順序という形式をとった文、あるいは単語でも音韻の連なりとして表現していくことになります。

内言の意味は、意識の中で内言的同時的、かつ全体的なものとして存在します。それが同時処理です。外側にばらばらにあったものを内面として、ああこういう意味だと全体的に把握します。それを外に出すときは言葉として継次的なものとして展開することになります。内言というのは、どういう存在形態で、私の中にどういう形であるのか、たぶん、それはイメージとしてあるのだろうと。イメージは変容します。

子どもが、何でもないものを、「ケーキだ」と認める、本来はちがうものを「そうだ」と、イメージとして浮かべることができる、それはイメージの世界で構成されるので、容易に変容しやすく変わりやすいものです。変容しやすいということが非常に大事で、子どもが砂場で遊んでものを創り上げたりする、遊びの中でいろいろな話が広がっていきます。絵を描く、という世界が大事なわけは、それは子どもの中の意味の世界を子どもなりに作り直す作業をずっとして、それをこちらが理解することが大事だということです。そのことを通じて、子どもは創造性やクリエイティビティ、それらを作り上げて

いくことに繋がります。

まとめると、感情というのは内的なイメージとして表現されていて、私たちの内的な状態や意識の内容は、内的なイメージの形を取りうる、イメージという形で存在しているわけです。内言は、言葉だと思わないほうがいいだろう、イメージだと思ったほうがいいだろう、内的な意味をとるのが内言の意味です。非常に抽象的な話のようですが、子どものことを考えるとき大変重要です。表情を見るだけでわかります。

同時処理、継次処理という言葉が流行らせたのは私、リバイバルさせたのは私だと思いますが、それを理解するのは表面的な形で理解されても、先に行けません。ヴィゴツキーやルリヤの心理学をきちんと理解することが大事だと思っています。

プランニングと情緒

今は情動の話をしてきましたが、情動は、その人のその人らしさ、人格の内部構造に依拠して、そこから生まれる価値観、感情、情動的態度です。それが意味の世界で非常に大事な部分をなしている、その意味の世界は、実は、意思決定をして、何かをするときに、何を大事だと思っ、何をするか、そのことにつながっているということです。

プランニングという言葉についてです。ある自分自身の目的に向かって、何をどうやってやればうまくいくか、考えて、実行し、その結果を自分なりに判断し、自分なりに変えるか、もっとやるかの判断をするプロセス、それをプランニングと言います。出発点は、自分がこうしたいと思うことです。意味の世界の中の感情の世界、そこがプランニングの出発点、個人がこうしたいと思う出発点です。

何よりも大事なことは、行動の動機づけを生み出すことが情動の一番大事なことです。もっとやりたいと思うのか、もう嫌だと思ふのか、接近か回避かということ、もっとやりたいと思えることは、動機づけになります。回避するのも動機づけのもとです。より積極的に何かをしたいと思っ、それが生物学的な意義で一番大きいだろうと思っ、

松本元（まつもと げん）の「脳とコンピュータ」の5巻に書いてあることです。この中で、「意欲は情に支えられる」と書いてあります。その人の気持ち、情動を周りが受け入れることにより、意欲が生まれてくるということです。その人自身がこうしたいという思いを持っ

ているものを、周りが受け止めてくれて、それを支えにして、そこから初めて意欲が生まれてくる、情が受け入れられないと頭は働かない、その人の情動そのものが受け入れられる周りの支えがあって初めて知的な活動が起きて脳も育っていくと書かれています。そのとおりだと思います。特に、情動が快のときに、脳が活性化され、育ちます。不快な時には脳は不活性となり育たない、不快だったら何もしたいなくという気持ちで何かが働くわけがないんですね。何かしたいと思うから脳が働きます。

このことの大事さを、杉田裕（すぎた ゆたか）という人が言っています。その人があるところで書いたものをまとめたものを本として出しています。「総説精神薄弱教育」という本があります。その5章5節に、「精薄児と動機づけ」というところが出てきます。読んでいて、ああ、そうだと思っ、

「教育の大きな目的のうちの1つは、自覚的な生きがいのある充実した生活をおくらせること」とあります。自分なりに選んで、これをやりたいと思える生活が送れるようにすることが、知的な困難を抱えるお子さんを育てていくときの大きな教育の目的だと言っています。あれこれのスキルを身につけるのが目的だとは言っ、

生きがいは単なる要求の充足だけでは生まれてこないとあります。それは、そうですよね。食べたいから食べるということではない、むしろ、ある程度の困難や障害を克服するときには生きがいを感、

「生きがいは失意や絶望の中からは生まれな。将来への希望が差し込め、と、鮮やかな生きがいは蘇える。」、今はだめだが、明日はこういうことをやろうと思っ、

「生きがいは蘇ると言っ、その通りだと思っ、

「生きがいの創造のためには、将来への希望が必要なものな。」、と書いてあります。将来、このままだこまで続くかはわからなけれど、何かしたいという希望が持てていれば、生きがいは持ててくるだろうと。彼らの将来は現実には暗くとらえがちです。将来の希望に満ちた配慮が必要です。学校の中はそうなっ、

生きがいはまた、自己の行動の反響がよい意味で周囲から返ってくることで生まれます。自分のやっ、

周りの人の反応によっ、

お母さんは子どもが自分を頼るだけで、そのことだけで母親であるという自覚が人生を豊かなものにしてくれます。私は読んで「ああ、そうだ」と思っ、

「こうしたい」という思いがあっ、

そうすれば生きがいは生まれるし、建設的に生きていくということにも繋がります。だけ、

「精薄児はその行動への反響は空しい手応えの少ないものであることが多い。いやその行動への反響は非難叱責嘲笑として、痛々しく彼に返ってくることさえ珍しくない。」これは40年以上前に書かれたことです。今でもどこまで変わったか私はわかりません。ここまでひどくはないでしょうが。

きちんとした「健康なエコー、こだまでその行動に応じてやりたい。行動の意欲はそこを手がかりに湧いてくることになる。」意欲というのは、その子がやりたいという思いを周りがきちんと受け止めることで、よりやろうという意欲として生まれてきます。そういうものを、より社会化し、より建設的な方向へ向かっていくようにする、それが教育ではないかと言っています。

知的障害の子どもたちの教育は、まさにそこに大きな目的があります。それが教育そのものの目的として、そこにあるわけです。あれこれのスキルや知識を身につけることも必要ですが、それ以上に重要なことは何かというと、常に将来の生活に意欲的にかかわっていきける力を子どもの中につける、そのために何かをしているのです。だからこそ、それは子どもの大元にある、情動や感情にきちんと目を向けないでいたら育たないだろうと思います。

プランニングを分析する三つの水準

プランニングは、情動的なものが出発点になり、動機付けになり、そこから何かをしようということから生まれます。そのプランニングを考えると3つの水準で考えるのが大事だとある人が言っています。活動水準と、行為水準と操作水準があります。

活動水準とは、人間の活動。人間が人として生きていく、その毎日の毎日の生活を将来に向かってどうやってやっていくかということです。まず、人の人生全般の目標や動機を実現したり遂行したりする水準、これはわれわれだって難しいが、それでも何かをしたいという思いがあり、何かをやっています。障害児教育をしたいという思いがあり、障害児教育にかかわってきているのです。目の前の子が変わっていくことに希望を持って関わるろうとしているわけです。将来的にも、何をやるかという目標や動機はどこにあるか、それによってどういう活動をしているかということ进行分析するのが活動水準です。

そして、その目標を実現するためには、今、将来のために何をしておくべきかということがあります。例えば、私がこれから10年後、施設をつくりたいと思えば、金を作る必要があり、人を養成しなければいけない、人間

関係をつくらなければいけないということがあります。個々を実現するための行為の水準があります。さらに、お金を貯めるために何をするか、今日の昼飯にはお金を使わないようにしようと、そういう制約条件の中で、今日は1000円しか持っていかないと思うようにして行動します。

そういう、今の条件の中の制約に応じ、将来に向かっていくための行為、それが操作水準です。課題に埋め込まれた制約に従って、問題解決のために働く、そういう方略や作戦です。それらの水準から考えなければいけないよと言うのです。子どもの場合も同じです。

ルリヤと21世紀の課題

実は、ロマンチックサイエンスという言葉は、ルリヤが言い出しました。神経心理学の人です。これについて、オリバー・サックスという人が「妻を帽子と間違えた男」という本の中でロマンチックサイエンスについて書いています。ロマンチックサイエンスが実現されないと、21世紀を乗り越えていけないと思ったということ、また、障害児教育と関連して考えると、ロマンチックサイエンスで大事なことですが、抽象性より具体性が大事ということ、個々に生きている人としての具体的生活を持った人間をどういうふうに私たちが理解し、科学として実現するかということが大切です。

たとえば、この子はIQが70という言い方をします。実に抽象的です。それでは、本当のことが見えない、そうではなく個々の具体性をどう見ていくか、それをするためには、障害という言葉も抽象的な言葉です。そうではなく人、具体的な人間がいると受け止めていくことが重要ということです。そのためには、プランニング、要するに、その人は何をしたいくて、どういうことをしているかの世界と、情緒、情動ということをちゃんと見ていかないとダメだろうと考えています。

これは、「THE EXECUTIVE BRAIN」という本で、翻訳されています。「市民化された心」とありますが、それは、コミュニティなどで皆と一緒に生きていく心、みんなと一緒にうまくよりよく生きていきたいと思っている心と私は理解したほうがいいと思っています。そういうものと前頭葉の関係性を述べた本です。これは、ゴールドバーグというルリヤの弟子がかいたものです。前頭葉がうまく機能することが人間を創るということ、ミケランジェロがかいた「アダム」の創造です。前頭葉をどうやって機能化させるかが重要だということです。こうしたい

という思いと、どういうことをしたいと思って生きていくかということが、まさに教育の力だと思えます。

この本の中に、何が書いてあるかという、あらゆる精神過程のうち、目標を持つということはまさにアクター、演じている自分自身に向けられた活動だ、ということ、目標を持つとか、つくるということは、「I need」ではなく、「これは～～である」とわかることです。私がこうしたいと思うこと、目標を持つ能力が何もないところから生まれてくるということは、自己、自分の内的な表象、つまり自分の中に自己が生まれてくると密接不可分であると書いています。こうする、こうしたいと思えるようになって初めて、自分というものを自分の中につくりあげることと繋っている、まさに教育が、その人自身を、その人らしく育てていくことに繋っていきます。

ロマンティックサイエンスの言葉との関係でずっと語られています。「心理学における古典的な科学へのアプローチとロマンチックな科学へのアプローチの葛藤が高次の心理学的機能の説明的な生理心理学と記述的な現象学的心理学の間に存在する危機の基礎である。」と書いています。前半は実験的心理学としてのもの、後半は、フロイトの世界です。この2つが、交わらず、ぶつかっている状況があります。そのことが心理学の危機だとヴィゴツキーという人が言っていました。そのことにルリヤは惹かれて、自分の仕事をやっていくようになりました。

生理心理学的な基礎にあるものは、細胞病理学の考え方があり、いろんな複雑な現象を要素に還元していくとその結果としてすべてがわかるようになるということがあります。要素に切り分ける作業をする、それを還元主義といいます。心理学でも同じことが起きてきています。要素に切り分けていけば、記憶、知覚、思考、言語、いろんなものにわけられます。分けるほど、本当はわからなくなるはず、分けていけば、わかるだろう、と考えてきたのが還元主義です。学習も還元主義的にやられてきました。基本的要素は、随伴性と強化に振り分けられます。

ルリヤはスキナーを評価しています。ファンクションに限定しているから。そこからすべての人間の意識まで全部説明できるだろうと考えます。あるいは、排除して考える世界になるのか、そうすると、心理学はちっとも面白くないわけです。人間を扱うのではなく、知能、記憶を扱うものになってしまいます。そういうものが心理学の世界からなくなってしまう状態になっていきました。そこをどうやって回復するかというのが、ルリヤの考えてきたことです。たとえば、分子生物学で、DNA、

遺伝子によって人間はほとんど決定されて、説明できてしまうという考えになってしまう、また、数学的にもできる、確かにそういったことはできる部分もあります。人間の現実を機械的モデルに全部置き替える、それが現実に行われています。そういうことで、人が本当に理解できるのかということです。

ルリヤは、人間の心理学的プロセスは脳の生物学的機能が、人間の文化にしっかりと浸ることに決定的に依存していて、文化との関係性がないことは、人間の心理学的プロセスは完成していかないと考えました。脳の回路は文化的に組織化された相互作用を通じてはじめて発達する、文化との関係性がある初めて脳が発達します。相互作用がないと、脳は発達しないし、正常に機能しません。私たちの文化を媒介にして、子どもと関わっていくことによって、脳は発達すると言っています。だいたい皆そのように考えています。人類学者、あるいは科学者、計算論的神経心理学者は、それぞれの文化との関係性がなければ、人は人にならないと言っています。

ゲーテが、生きている現実を理解することについて、次のように言っています。「理論は灰色だ。永遠の緑は生きた木、そのものだ。」「生命の木」そのものが永遠の緑なんだ、理論になったらもう貧しくなってしまう、生きている現実のほうはずっと豊かだと言ったわけです。

ルリヤがめざしたもの

ルリヤは、いろいろな仕事をしています。人間の高次神経機能、まさに神経心理学の大きな教科書を書いています。その他にも、「偉大な記憶力の物語」、1人の脳の損傷を受けた人の伝記的なさまざまなことを記述したものの、これは訳本が出ています、「失われた世界」、「閉じこめられた世界」という本です。1人1人の具体的な人間について、丁寧な様々な生きている様子を語ろうとします。片方は、非常に分析的に人間の皮質機能は何かと書いています。片方は毎日の生活でどういうことをしているのかを書いています。

その2つをやっています。片方は、非常に分析的に、細かく見る作業をし、もう1つは具体的で記述的な世界です。クラシカルな分析的な手法もルリヤは考えました、それは心理検査にもつながっています。でもそれだけをやりたかったかということそんなことはなく、オリバー・サックスが書いていますが、彼は、これらを個人の文脈の中で実施しました。認知テストをどうするのか、個人の中で、非常にいろいろなやり方に、細かく変えて分析

していくというやり方、個人のヒストリーに合わせて、どう生きてきたかに合わせて分析します。認知検査は、ある一定のやり方でやる必要があるが、それだけではだめです。その部分が実はあるのです。ルリヤが一番好きだったのは、伝記的な研究です。それはなぜか、それはある種のロマンチックサイエンスだから。だから、伝記的なものを書くのが好きなんだと。それを実践しているのがオリバー・サックスです。

たぶん、教育をしている人は、その人と一緒に生きて、その人がどう生きていくのかを一緒につくろうとするわけですから、まさに、個人の伝記を作る具体的なことをやっているのです。そこが本当の教育、ロマンチックサイエンスとして、科学としての教育だと思います。分析的なものは、古典的な科学です。そこに具体的なものと記述的なものがうまく混ぜ合わさっていったときに、アンイマジンド・ポートレート、まだ1度も想像したことがないような人物像が浮かび上がる、まさに1人の人としてのポートレートが出来上がる、それをロマンチックサイエンスと言ったわけです。分析的であることと、記述的であること、個々の具体的なことをうまく統合することで、はじめて、ある人に到達できるということです。

だから、教育はそこが抜けるとたぶんだめだろうと思います。観察は、具体的なものから出発するけれども、それをしてしまうと、それは失われる、私たちが分割したり、分析していくとなくなってしまいます。具体的なものを見ているが、やはり分析してしまい、大事な具体性が失われてしまいます。

私たちが必要なのは第3の段階、統合していくという段階が必要です。それは、具体性と分析的なものが混ざり合ったもの、分析的であることと具体的であることが混ざったもの、それが第3の段階です。

戦前に田村一二という知的障害児教育をした人がいますが、彼が書いた実践記録、それはとても面白いです。杉田裕はそれを抜き出してきて丁寧に解説しています。それは、非常に具体的なものです。知的障害教育ということを見ると具体性と分析的の統合は抜け落ちてはいけません。こんなことは、教育だと当たり前なのに、当たり前でなくなっています。ロマンチックサイエンスをやっているという認識で動く必要があります。「具体に登れ」と書いてあります。これはルリヤが言っている言葉です。抽象ではなく、具体をどれだけしっかり大事にしていけるのかということです。

子どもは具体的な存在です。生きていて、IQいくつ

という存在ではありません。お菓子やふりかけが好きで、もっといろんな世界を持った人間です。子どもが動くことで、子どもなりの意味をつくっていくのです。意味の世界ができていきます。子どもは自分自身の意味をつくり出していきます。先ほどの内言の意味の世界は、こうしたいという子どもの思い、そして情動的態度と、「～である」ということがわかることが、統合した世界としてあるのです。ということは、子どもの独自の意味がやっぱりあるわけです。それはバラバラに切っていって分析されてしまうものではありません。

そういう意味で、具体的なものを扱っていく認識のもとで子どもを見ていかないと、今、これを伝える、この言葉を教える、その世界だけが浮かびあがってきて、ちょっとおかしいんじゃないの、という話になります。ロマンティックな科学として教育があってほしいと思います。

もう一つ、ルリヤの言葉です。「思考や考えを構成することなく、何かを単に命名することは全く不自然なものである。完全な思考や考えを構成することばの表出がコミュニケーションの基本的な単位なのである。したがって、もし単語が言葉の要素であるなら、文は生きたスピーチの単位なのであると主張できる。」、物に名前をつける行為なんて、あるわけじゃないのと言っているわけです。絵カードを見せて、「これなーに？」という、そんなのは全然意味ないよ、と言っています。どうということかということ、ワンワンがいる、ワンワンをなでたいとか、キスしたいと思うかどうかということです。その世界があって初めて、「あ、ワンワンね」と、そこに意味があるのです。「これなあに」「ワンワンよ」という世界はありえないと言っています。子どもの中にはもっと違う意味があって、たとえ1つの言葉であっても、思考、考えがその中にあります。

事例から

ある事例の紹介をします。私がやった事例ではなく、教え子の事例です。「明日から学校に行かない」と子どもが言うわけです。去年、多くの子が自殺していた時期です。先生の言っていることがわからない、聞いて理解がうまくできない、3つの指示を一度に出されたら全然わからない、勉強がわからなくてつらい、脳を取り替えたい、学校に行かないと決めて、中学2年生からパタッと行かなくなってしまった、それだけではなく死にたくもなってきた、外出できない、部屋からも出られなく

なっていました。前頭葉てんかんは、もともと持っていた、学習の遅れもあった、小5のときに、語彙が少なくと担任から言われました。算数の授業中にわからないと手を挙げたら、君のために再度説明が必要になる、と担任がいら立ってしまいました。ここから、もう嫌だとなっちゃったわけです。

中学校は、ちっとも対応してくれず、保護者が大学に相談に来ました。DN-CASだと、プランニングは低く、同時処理は結構高くて継次処理が結構低いです。落ち込んだ状態で検査したこともあるでしょう。そのことも頭においておかななくてはいけないですね。でも、こうしたという思いを、もう持てなくなっているわけです。何をやるかということで、料理を計画、作り、振り返りの作業をしました。なるべく自信が回復するようにしよう、学習は少しずつでいいことにしました。最初は簡単なホットケーキ、2回目は焼きそば、これは切るものが増えた程度、3回目はチーズケーキ。これになると、焼き方などいろいろ面倒だと思いますが、時間の見通しなどを持ちながら。そして、ハンバーグ、どうやって作る、どういう材料、器具が必要か、それらをプランする段階からして、全部自分でチェックしながらやるという作業をします。ハンバーグを作るのに、タマネギを切っている、だけど止まりません。前頭葉てんかんがあり、一度同じことをすると止まらなくなる、それを言葉で止めます。それができました。

その日、ハンバーグをつくったが、それは自分のために作ったのではなく、お父さんとお母さん用のハンバーグをつくって、わざわざ写真で送ってくれました。こうなると立派なものだと思います。他の人のために、両親ではあるが、自分が出来ることをやってあげたいという気持ちが、引き出されてきたんだと思うんです。すると、死にたいと言わなくなったし、漢字の学習は一生懸命するようになり、いろいろな文章も読むようになりました。でも学校は行ってません。行かなくてもいいやという状況です。楽しく過ごしたいという思いを持てることが大事です。

この子が書いた詩「色」です。「いろっもおもしろーい。だって、色と色を合わせるだけなのに、ちがう色になる。いろっただのしーい。だって暗い色や明るい色やすすしげな色がある。さあ、今日は何ませる?」、じょうずだなと思います。他にもこんな詩を書いています。(「海」, 「手」, 「涙」, 「きょうの空」の詩を紹介)

検査の結果は、たぶん、気持ちが落ちているとか、や

ろうという気がないということも反映されています。その上で、検査だけで判断しようと思うと、たぶん大きな間違いを起こすと思います。

これは、何だったのだろうかと考え、結局、「こうしたい」という思いをどこまで育てるのか、どんな方向へ育てていくのか、思いをどうやって支えながら実現していくのかだと思います。それは、決して、引っ張ることではないと思います。

事例Ⅱから

これは、ある子が、私に見て欲しいと言ってコピーをくれたものです。高等養護学校に行っていて、もう卒業です。果樹研究所の仕事をするようになったのですが、現場実習をして、次のような文を書いています。「僕が果樹研究所で木に薬をつける仕事をしました。なしの木やももの木は菌がはいってしまうから薬をつけます。僕はこの仕事にむいていると思います。いろんな仕事ができるからです。4月から社会人になります。仕事が楽しみです。がんばりたいと思います。」中度クラスの遅れのある男の子です。この子が、これを書いてくれて、見て欲しいとってくれたことも嬉しいと思います。

それよりも、こちらも嬉しくなったんです。「前川先生 ○○くんの作文のコピーです。来年度から社会人として自覚を持ってその準備をしているようです。まだ学生の私は尊敬してしまいます。特に、仕事はなぜ○○をするのか、といったことをきちんと教えてもらい、自分の仕事の意味と重要さに誇りを持っているようです。(中略) こんな風に仕事を持てる○○くんがうらやましく、また、うれしく思っています。○○くんから前川先生にも見ていただきたいとのことでしたので、コピーをおかせていただきました。」こういうメモをおいて、果樹園の文を置いてくれました。つい最近のことです。ものすごく嬉しいです。

最後に

自閉症の男の子で、料理をしている子が「自分の作った物です」と言って持ってきてくれる、嬉しいです。その子とは、週に1回くらいしか会わないけれども、ずっと付き合っていく中で、子どもが私をどう思ってくれているのか、考えます。その子なりのお話、伝記をつくっているんだと思います。

これで終わります。私の思いだけは十分伝えたかなと思います。